

だんじり会館のあり方等検討委員会 議事概要

審議会名 第2回だんじり会館のあり方等検討委員会
 日時 2024（令和6）年11月6日（水）10:00~12:00
 会場 伊賀市役所本庁舎 会議室 501
 出席者 【委員】
 小林慶太郎委員長 福田良彦副委員長 中村晶宣委員 菊野善久委員
 重藤邦子委員 山口真由子委員
 【伊賀市】
 産業振興部長 堀川敬二 産業振興部次長 福山朋宏
 観光戦略課長 山田靖子 同課主幹兼誘客推進係長 辻本康文
 同課主幹兼事業係長 川合理恵
 欠席者 【委員】
 後藤渡委員

傍聴者数 2人

.....

1 開会あいさつ

小林委員長

2 第1回委員会の意見整理及び検討の進め方

- 事務局より説明 資料1・資料2・資料3
- 委員から質問無し

3 検討項目

(1) あるべき（ありたい）姿の検討

（小林委員長）だんじり会館のあるべき姿、ありたい姿について検討を深めていく。5つのテーマごとに委員から意見を出してもらいたい。

テーマ1 「文化」か「観光」か

（小林委員長）「文化か観光か」はどちらか一択ではなく、文化を生かしながら観光をとということだと思う。前回の意見をまとめると、共通認識として「文化観光としてのだんじり行事は、地域まつり町の人・歴史・熱量の維持があった上で成立するものだ。」と事務局で整理されている。

ここで、あるべき姿に関する論点は2つあり、1つ目は、「地域（祭り町）の人・歴史・熱量、をどのように維持していくか」。若い世代の祭り離れがあるとすれ

ば、どう食い止めるかということもある。

2 つ目は、「無形民俗文化財を地域資源とした、観光のあるべき姿」である。祭りの期間以外にこれを目指して観光客が来ることが、果たしてどれぐらいあり得るのか。その必要性とか重要度も含めて考えていく必要があるだろうという、この2つの論点を出していただいた。これについて、共通認識と自身の意見が違う、或いは、2つの論点に関しての意見を述べていただきたい。

まず事務局から後藤委員の意見を紹介してほしい。

(事務局) (欠席の後藤委員から預かった意見書の該当項目を代読)

(小林委員長) ダンジリ行事という文化についてどれだけ理解を深めるか。また、ダンジリ行事への理解を深めることを目的として、観光に来ていただくことがあり得るという意見である。

(福田副委員長) 私が若い頃からエコミュージアムの取り組みをする中で、当時の先生から言われた印象に残る言葉は、「地域の文化や祭りを紹介する時に、つい地域の人には観光客が一番いいところを見せようとサービスをし過ぎて、疲れてしまう。実際は、地域の一番良いところは地域の人々が十分楽しみ、その上で、観光客には少しだけお裾分けをすることが、持続的に続けられる、楽しく続けられることである。」である。やはり核心の部分、文化をどう継承するか。その上で、うまく観光につなげていくことであり、後藤委員の意見に近い意見を持っている。

2 点目は、資料3のテーマ1にある「祭りの期間以外における来訪」という論点について、現在は、上野の街に来訪すると、忍者屋敷、伊賀上野城、だんじり会館など色々ある中から、観光客は行先を選びにくい状況になっていると思う。理想的なのは、はじめに全体をガイドする施設があり、そこで興味を持った人が「だんじり会館に行ってみよう。」「忍者屋敷に行ってみよう。」となることである。祭り期間以外ということもあるが、現在は中心市街地の観光地の全体をガイドする施設が無いことで、個別のコアな魅力を持っている施設への来訪者が伸びない状況になっていると思う。それは伊賀市の今後10年先に向けて考えていくべきことだと思う。

(小林委員長) 良いところを見せようとしてサービスをし過ぎて、町の人が疲れてしまっている。良いところは町の人のもので、観光客にはお裾分けをするくらいで良いという意見である。祭り町の人々の熱量の維持という観点では、疲れすぎると熱量が維持できないから、ほどほどにすべきという考えでもある。

2 点目は、上野の市街地だけでも色々なものがあり、どこへ行けばよいか観光客が迷わないようなガイド的な施設ができると良いという意見をもらった。

(山口委員) 私は新天地商店街という駅前の商店街をずっと管理しており、普段もそこにいる。今年の上野天神祭の10月18日から20日の期間は、そこで子ども食堂や高校生の自習室を運営し、皆で祭りを楽しもうという目的で旧郡部の阿山、柘植

にある店舗にも出店してもらった。驚いたのは、阿山・柘植に住んでいる人は上野天神祭を全く知らないことだった。伊賀市全体でみると、やはり郡部とまちなかの人との上野天神祭に関する意識や感じ方が全然違う。出店した人は、まるで他府県の人と話しているような感覚だった。まずは伊賀市全体の人に祭りを知ってもらうところからだと思う。

(小林委員長) 次のテーマの意見であるが、市全体のだんじり行事に対する認知、興味関心の醸成が重要だということも関係する話である。地域の皆さんの熱量の醸成という意味で、現状は祭り町の人だけの関心事になっているので、旧郡部の人にもすそ野を広げていくほうが良いという意見である。

(重藤委員) 私は、山口委員の意見にあった郡部の住民なので、ほとんど祭りは見たことが無い。今年も仕事の都合で見られなかった。会社の関係者にもだんじり会館の印象を尋ねたところ、「だんじり会館を知らない」、「行ったことが無いから、何のためにあるのか、中はどうなっているか知らない」という意見だった。小林委員長はこの前初めて会館を見られたということだが、どんな印象を受けたか。

(小林委員長) 詳しく説明を聴いたり、よく見ると、凄いものだと感じられた。ずっと県内に住んでいるが、だんじり会館に行ったことがなかったし、上野にそんな祭りがあることは知っていたが、会館の存在はよく知らなかった。まだまだ知られていないと感じる。

祭りの開催時期と会館の展示の連関という観点では、祭りに行けば楽しめるのだろうが、祭り以外の期間に行っても、その先につながらない。

展示の仕方という観点では、展示物は素晴らしいものだが、上野の町の人にとって、どのような意味があったか、どうやって継承されてきたか、町の人々の日常生活とどのように繋がっていたかがもう少し分かり易ければ、リピーターが増えていくのだろうという印象を受けた。

(重藤委員) 実際、青山地区からも子どもたちが上野天神祭に行っているが、どれだけの子どもがだんじりを見ているだろうか。恐らく、屋台を見て回っているだけの子どもが多いと思う。伊賀市の子どもたちがだんじり自体をしっかりと見ようと思えるような、且つ、伊賀市の子どもたちは必ずだんじり会館に遠足で行き、何かを学び、記憶に残り、心に響くことがあれば良いと思う。

(小林委員長) 旧郡部の住民にとって、上野天神祭はあまり認知されていないという意見である。

(菊野委員) 私は町衆の一人だが、居住地の農人町は城下町の中でも離れた場所である。上野天神祭との関係は、2基ある神社の神輿のうち片方は農人町の神輿で、神社の氏子という位置づけでもある。神輿の担ぎ手は、東京オリンピック開催の頃まで町衆ではなく、平野地区の人が中心に担ぎ手や神事に参加していた。最近は若

い人が少なくなり、農人町の旦那衆は担がず曳いてもらっている。故に、だんじり町や鬼町とは参加意識や見方が違う。祭りでお渡りが農人町を通るので、神社全体の氏子の立場としてかなり応援や支援をしている。

本題の「文化か観光か」については、「文化があって、その上に観光が成り立つ」のは当然で、資料に書いてある共通認識のとおりである。

ただ問題は、文化をいかに守っていくかと、熱量を保つためには当然、文化を守るための資金が必要であること。資金をどのように継続的に捻出していくか。市から助成もあるが、それも含め、今後どういう展開になっていくかがポイントである。

当然、経済界として商工会議所も応援はしているが、やはりだんじり町・鬼町の人々の熱量と、それを支援する民間や行政のバランスと継続性が大事で、それに関する先の見通しも必要である。町の少子高齢化は進んでおり、この先、どうやって支えていくかという問題もある。要は文化継承には、熱量とともに資金も必要であると思っている。

(小林委員長) 今年の出生数が70万人を切ると今朝の新聞に載っていた。人口が減っていく中でどうやって文化を維持していくか。逆に言うと、皆が本当にそれを維持していかなければいけないという共通認識を持っていないと、残せない。そのような熱量も必要である。昔から町衆が文化として一生懸命祭りを支えてきたが、今は経済界の方々が中心になって支えているものの、今後それをどうやって維持していくか。市からの助成に頼るのか。しかし、市は相当の金額を出せるのかという課題もある。その一方で、文化はどうやって維持していくかという課題もある。そのような状況で観光客が来ることについては、何かお考えはあるか。

(菊野委員) 福田副委員長から意見のあった、観光案内のプラットフォーム機能を持つ施設の話について、観光の視点から、伊賀はタビマエで忍者、芭蕉、伊賀上野城というキャッチーなコンテンツに注目が集められるが、訪問先としてだんじり会館を選ぶ人は少ないと思う。それは観光入込客数を見ても明らかである。タビナカでどうやって地域の文化に深く根差したところに来てもらうか、その方策を検討しなければいけない。今の観光案内所だけでは力不足である。今度できる施設の中で、そういう形があれば良いと思う。せっかく出来る施設だから、どの施設も入込客数は伸ばしていきたい。

(小林委員長) 伊賀上野城や忍者を目指して来られた人が、伊賀の特に上野の歴史やまちの成り立ちを認知してもらう機会になり、この町にはだんじり行事があることを知り、見に行ってもらえるように誘導していけば、きっとだんじりというものに脚光を浴びてくるだろうという意見である。そういう意味で菊野委員から話のあった、ファンやサポーターをうまく作って、誘導していくという視点も大事だと感じた。

(中村委員) 今年の祭りは、第1回委員会が終わってから開催したので、意識をして見ていた。福田副委員長の意見のとおり、祭りを通じて祭り町の人たちに「良い恰好を見せようとするな。自分たちの本当の姿や悪い面も、今までどのように祭りを繋いできたかを見てもらおう。」と伝えたが、結果として飲酒をしている人が沢山いた。祭り町の人はある意味恥ずかしがり屋で、扱いが難しい印象である。だんじり会館の話をする、今年は祭り3日間のうち金・土曜日は雨だったが、それでも搬出作業は行った。驚いたことは、だんじり会館から搬出するところを毎年見に来ている人がいたことである。もちろん、近くの桃青の丘幼稚園の園児は、会館ができてからずっと、雨が降っても見に来て、応援してくれている。開館から35年が経ち社会の情勢が変わる中で、会館の位置づけも変化してきたが、特に今年の様子を見てみると、コロナをきっかけに変わったという気がしている。コロナで祭りが3年間中止になったが、だんじり会館からの搬出搬入だけは、ずっと続けてやってきた。斜に構えている人や鬼町の人も、入替作業に沢山の人が集まってくれた。そういう時代を経て、だんじり会館のあり方として、あるべき姿・あってほしい姿を考えると、自身はだんじり会館はどうでもよいと思っていたが、今年の祭りを見て、そういうものかと感じた。第1回委員会でも言ったが、上野天神祭のリーフレットを自費で作っていた人は、「いつでも見られるのではなく、だんじりは年1度の祭りで組み立て、それを見て綺麗だと感激するものだ。だんじり会館は本来は要らない。」と言っていたが、時代が変わり、様子も変わってきているんだという気持ちになった。

もう一つは、再来年の2026年がユネスコ無形文化遺産登録から10周年になる。だんじり会館の話から離れるが、これまで上野美術保存会はだんじりの幕や金具、鬼の衣装・面をどのように保存していくか、或いは、鬼の面をどうやって新調するかだけに取り組んできたが、今年から10周年に向けて、だんじりの文化的な面を、例えばお囃子、祭りと町の生活にもう少し重点を置いていきたいと思っている。特にお囃子、子どもという観点での会館の位置づけとして、そこで練習ができるんじゃないかとも思っている。コロナ中は町の集議所を借りて練習していたが、だんじり会館を借りられる方が良い。また、10月3日に文化会館でお囃子をしたが、あれは9町が混合で演奏をやった。9町のだんじり町が個々の町のコンサートもやれたら良い。それぞれの町のお囃子がどんな演奏かを、違う町の人には全然知らない。自身も違う町のお囃子は知らない。10月の演奏では皆で合わせるのに相当苦労した。一つ町のお囃子についても、100年前と同じように演奏しているから、録音はしていないし、楽譜もない。言葉だけで打楽器はコンチキチンとかテンツクテンと言ったり、笛はオーヒヤヒヤと言っているだけで、指の動きはみな見まねでやっている。そういったものの継承もやっていきたい。今はデジタルで色々できるので、録音もやっていきたい。何よりも皆が

集まって各町のお囃子を聴く場所を作ってもらいたい。

要するに、だんじり会館はどうでもよいと思っていたが、3 日間の祭りを通じて、何か良い方法で維持できないかと考える立場に変わった。観光よりも文化継承のために使えないかと思っている。長浜市の曳山会館は、主としてだんじりの修理と、子ども歌舞伎の練習をする施設になっている。そういう方向性を考えてもらえればと、この会議に期待している。

(小林委員長) 色々な話を聞かせてもらった。だんじり会館については、毎年コロナの期間中也搬出作業を見たい、そこを一生懸命見に来られる人が一定いて、ファンやサポーターという形で来られることを話していただいた。

一方で、祭りというのは年に 1 度だから感動するものだ。それを四六時中サービスすると、祭り町の人たちも疲れてしまうということで、先ほどの話にも繋がってくる。そして、祭りは基本的に年 1 回であるが、それをやるために、お囃子の練習をしていかなければいけないので、まさに文化を継承するという意味で、練習の場が必要であると意見であった。これは、実は祭り町の人にとって、だんじりは暮らしや生活の一部でもあり、そういった姿を見てももらえると良いのかもしれない。つまり、祭り町の人たちの暮らしと祭りがどのように結びついているかを見てもらうのが、文化を基軸にした観光ということかもしれないという話をしていた。

論点が、文化をどのように継承するか、練習場所をどうするか、子どもたちがどこでそれをやるかという話になってきましたので、テーマ 2「無形民俗文化財としての維持継承」に移っていく。

テーマ 2 無形民俗文化財（行事）としての維持・継承

(小林委員長) 委員会の共通認識は、市全体のダンジリ行事に対する認知、興味関心を高めていく必要がある。そして、そのためにも、祭り町の人々のモチベーションの維持継承は必要であるという意見である。論点としては、どうすれば市民全体に普及していけるのか、どうすれば祭り町の皆さんのモチベーションを維持させることを得市全体として取り組んでいけるか、という内容である。重複するところもあろうかと思うが、付け加えるべき点、意見があればお願いしたい。

(重藤委員) 会社の仲間でだんじり会館について話している中で出た意見は、中村委員も仰っていたように、「お囃子のコンサートや劇などがあれば、行ってみたくなる」、「だんじりが並んでいる場所で、演劇やコンサートが行われれば、壮観な感じがして良い。」など、だんじり会館にどうやって人を集めるかという意見だった。青山地域の中には知らない人が多いので、伊賀全体の市民として共通認識を持ち、何か心が動くことになっていけば良い。自分自身がこの委員会に参加することで興味が湧いたように、興味を持ってもらうにはどうすればよいかという観

点で考えていくべき。

(小林委員長) 上野地域の人にとってだんじりは一大祭りだし、昔から守ってきたものだと思うが、旧郡部の人達にとって、自分の地域には自分たちの祭りがあるので、だんじりだけ市が肩入れしていことに対して、どんな印象を持つかという、そこをきちんと明確にしなければ、市がここだけに一定の支援をしていくことへの理屈が立ちにくいと考えられる。とは言え、だんじりは別格だから、伊賀市全体のシンボルとして残していかなければいけないぐらいの話が、皆の共通認識になっているかどうかが大事だと思う。

(福田副委員長) この項目で3点をお話ししたい。1つは、「郡部の子供たちもダンジリ行事を知る場所になれば良い」という意見について、私が関わっている民俗調査の中で、ここ7、8年、郡部の祭りの調査をしている。春日神社の祭りや長田地域の祭りなど秋に行われる所が多い。地域の人も、何かわからないけれど続けているということだった。調査をするまで私も知らなかったが、旧伊賀町の旧伊賀町の川東地区の祭りは中世末期から続いている祭りで、長田も江戸時代の中頃から継承されている祭りであることが分かってきた。

獅子舞の調査もそれと並行してやっているが、伊賀と名張で80カ所ほど、獅子舞の伝承が行われていて、それぞれが違うものだった。青山の青山の大村神社にある獅子舞は途中でおひねりが飛ぶ。先ほど山口委員から、「上野の祭りを知らないなんて、びっくりした」という意見もあったが、逆の立場になると、「自分たちの地域の祭りを上野の町の人には知っているのだろうか」となる。

ここで大事なことは、郡部の子供たちがだんじりを知る場所だけではなく、それを見ることで、自分たちの地域で行われている祭りや行事に関心を持つことである。伊賀市全体で考えた場合に、上野天神祭のダンジリ行事は、ユネスコ無形文化遺産でもあるので、まずはそれを見ながら、自分たちの地域はどうかという問いかけを学校の授業で先生がすれば、自分たちの地域の祭りを調べるきっかけになるといった、そういう展開もできると思う。重要なのは、上野天神祭だけでなく、地域のことを知る場になることだと思っている。

2点目は、「市全体におけるダンジリに関する興味・関心」という意見や、テーマ1にも「祭り町の人モチベーション」という意見があるが、今年、中村委員にお世話になり、鍛冶町のお囃子の見学をさせてもらった。4町ほど回ったが、それぞれ苦労しながらやってたし、何よりやっている本人たちが楽しみながらやっている印象を受けた。興味を持ったのは、どこも子どもが少なくなり、知り合いの人に声を掛けてメンバーに入ってもらっているとのことで、軒数が10軒ほどだがどうしているかを町の人に聞いたところ、「町の子どもはいないので、全て町外の子どもがやっている。指導者も全員町外の人。町の方は、だんじりの責任者である私一人だけである」という話だった。それでも、とても良い雰囲気

でやっている様子だった。中村委員から「上野天神祭は祭り町だけのものではない」と意見もあったが、どんどん広がっていき、それが今はもう定着しつつあることは、驚きだった。ただし、これを公募にすればよいかという話になるが、お囃子の練習は 2〜3 週間、毎日通う必要があるので、子どもの関心もだけれど、保護者の協力もいる。そういう意味で公募は難しいと感じた。

だんじりの曳手も同じで、一時期公募をしていた時に、貴重な幕をむやみやたらに触ったり乱暴に扱ったりしたことがあったようである。それは、町の人も信頼、信用のもとで多くの人に広めていけると感じているので、難しいと思うが、町以外の人にも広がを持たせつつ、どのように担保していくかが課題である。

3 点目はおまけのような話であるが、上野の町が、他の城下町と決定的に違う所がある。というのは、400 年前、藤堂高虎によってこの城下町が形成されたが、上野城下町で行われた発掘調査ではそれまでの中世の遺跡が出てこない。つまり、利用されてなかったということである。それは恐らく水の問題で、城下町は一段高いところにあるので、井戸が掘りにくかったとのだと思う。城下町の大手門は、その前の筒井の時代は小田町の方に開かれ、小田のところに城下町が形成されていた。それが、藤堂高虎が町をつくって、400 年以上続いている。まるでニュータウンのようなまちづくりが行われていく中で、上野天神祭を通じて町衆とお城、今で言うと行政の人が上手く連携し、人々の熱量を高め、まちのにぎわいを作ってきた。

さらに、実はこれに旧郡部も関係していて、郡部のほうでとれた米は全部を上野の商人が集めて、木津川を使って運び、大坂などで売りさばき、経済を回すことでまちづくりが形成されてきた経緯がある。やはり、今は町と村の対立より、町と村がどのように連携をしていくかが大事だと考えている。

(小林委員長) 実は、上野と旧郡部は元々繋がりがあるんだという話を聞かせていただいた。また、旧郡部の子供たちにとっても、ダンジリ行事を見ることによって、そこから自分の地域の祭りに関心が持てるようになっていくと良いんじゃないか。そういう位置付けとして、ユネスコ無形文化遺産に登録されてるダンジリ行事を継承していけばいいんじゃないか、という意見であった。

(菊野委員) 私の子どもも、福田副委員長から話のあった鍛冶町のお囃子に参加していた。実際、福田委員の仰る通りで、町の人は人がおらず、子どもは外部から来た子ばかりだが、非常に雰囲気が良い。色々なところから人が集まって、皆でだんじりを盛り上げようとしている。鍛冶町は本当に手弁当でやっていたので、旧町の中でも独特の雰囲気の町である。元々戸数が少ない所だったので、それだけ外部から人が集まり、頑張っていこうという意識が醸成された。そういう意味で、そういう人はだんじりのファンだと思う。そういう人が増えていけば、継承できると思う。

しかし、人を集める方策が、それぞれの町で違う。歴史的に言えば、昔はだんじりには、その町の長男しか乗れなかった。そのうち、次男・三男も乗れるようになり、そして女の子も認められたように、だんだん広がってきているわけだから、当然、町の人だけでは運営できなくなっているということである。恐らく、そういう形で運営されている事実が知られていないと思うので、それも含めて広報しながら、各町が独自の方法で募集をしていけば良いと思う。ただし、全体的な広報が足りない印象だが、人的にそれも仕方がないのかもしれない。

さらに、資金的な支援をどのようにするかも課題である。だんじり町の課題は幕の修理復元や維持管理に費用がかかること。なかなか他人の祭りに参加するのはハードルが高く感じられるが、町の大事な美術品を皆で継承していこうという機運を高めていき、皆で町の財産や美術品を守るという切り口でやっていけば、少しはハードルが下がるのかと思う。

(小林委員長) 福田副委員長から、公募をすると信用を置けない人が来る可能性があり、難しいという話があった。今、菊野委員が仰ったように、皆でこの町の財産を守っていこうという志のある人を巻き込んでいくため、人脈や繋がりから声を掛けて、輪を広げていくことが大切と思う。一方で、それをするためには、やはりお金の問題もある。美術品として幕をどうやって維持していくかという話だと思う。

テーマ3 有形文化財としての保全・保護

(小林委員長) 共通認識は、保全・保護の観点から実物展示は課題も多く、常時展示することで文化財が損傷する可能性もある。予防するために照度を下げる必要があるが、一方で薄暗いと展示品が映えないという問題もある。有形文化財の保全保護と無形民俗文化財の継承の両立を図っていくことはできるか、本物・実物の展示が必要なのか、或いは保全保護とその活用をうまく両立できるのか、そのあたりの意見を伺いたい。

(中村委員) 上野文化美術保存会である私の立場から有形の文化財の話をする、文化庁の審議会の先生からだんじりの幕を収納する時は、折り曲げたり巻いたりせず横にして引き出しに仕舞うように言われていることを鑑みると、だんじり会館で半年も下げておくことは不適切ということである。

しかし、私は、人が見て綺麗な美術品を1年のうち360日も引き出しに仕舞っておいても、何も意味が無いと思う。傷んできたら費用をかけて復元新調すれば良いと考えている。だんじりの金具も同様である。文化財の保全保護はそれほど重要だと思っていない。教育委員会は修繕費用を負担するための当然の機関である。

先ほど意見のあった鍛冶町の事例について、世帯数は10軒だが、実際は5軒程

度で、30 年前から一番危機感を持ち、将来を心配して町外からの手助けを率先して受け入れてきた。これとは反対に、町外の人に手伝ってもらうことを忌避している町もある。特に人口や世帯数が多い町はその傾向がある。

また、だんじりの曳き手に関して言うと、今年は9基のだんじりの曳き手のうち7割が他所からで、市内企業や三重県伊賀県民局で勤務している人だった。少ないが伊賀市職員もいた。伊賀市職員は曳き手以外のことも手伝ってもらった。中には、前に伊賀で勤務した人が他所に転勤しても手伝いに来てくれていた。加えて今年は三重大学の留学生約60人が協力をしてくれた。このように、何らかの繋がりで曳き手の7割が地元以外から手伝いに来ることは、毎年恒例になってきている。今後も色々なルートから繋がりを広げていきたいと思っている。ただし、曳き手の手伝いをすればお酒やご馳走を貰えるという発想で来る人はご遠慮いただきたい。今までの繋がりを活かして輪を広げていく方法でやっていきたい。ただし、悩みの種は子どもである。

(小林委員長) 曳き手の確保は今あるネットワークで確保していくが、一方で、お囃子の練習が必要な子どもの確保は課題があるということだった。

有形文化財の話は、だんじり幕は、保存の観点から平に仕舞っておくべきという意見はあるが、実際に祭りで使われている様子を見てもらわないと、祭りの当日以外は引き出しの奥に仕舞っていても意味が無いという見解であった。有形文化財だからといって大事にし過ぎると、祭り自体がやれなくなってしまうこともあるかもしれない。有形文化財の保存と活用をどうやって両立させるか、ほかに意見はいかがか。

(福田副委員長) 有形文化財の保護の観点で、日が当たらない所で温湿度管理された状態が理想であるが、現実的には難しい。現在のだんじり会館は常時観覧できる施設であるが、最近の博物館には、「見せる・見える収納」「見せる収蔵庫」という機能のある施設があり、例えば、子どもが見学に来た時だけ見学できるように、保存環境と観覧機能を両立させている。

文化財は活用しなければ継承されないという中村委員の意見は、その通りである。例えば、だんじり幕は月替わりで展示し、その幕の意義や織物の特徴を見せるのも良い。最近私が調査をした西町の引退幕は、もともと中国の北部で織られた蝦夷錦という織物が北海道アイヌ地方を経由して近畿地方に伝来したものである。中村委員の新町の印の幕も、見た目はモノトーンで地味だが、朝鮮毛綴という韓国の織物で、韓国でも殆ど無いものである。そういう物語があることを知ると興味が湧き、その幕の歴史的背景などが分かるので、展示することで上手く分かってもらえる仕組みが大事である。

だんじり本体についても木で作られているので、木は組み立てた状態のままだと重力がかかり車輪に影響を与えるので、問題である。

修繕費用についても文化財として大事なものである、中村委員の意見のように税金の中で修繕をすることは筋が通った話であるが、修理をする場所が無いのが課題である。幕は別の場所に運んで修理ができるが、だんじり本体の修理場所が無いので、そういう場所があれば良いと思う。

現在、中村委員の協力を得て、引退幕の写真を県立博物館で撮影している。幕は3メートルほどの大きさで高いところから撮影しなければ歪むので、博物館にある専用施設で撮影をしている。町の人の意向に沿っているかは分からないが、写真撮影所と見せる収蔵庫を兼ねたものがあれば良いと思う。

(重藤委員) 幕は、古いものはどれくらい古いのか。

(福田副委員長) 江戸時代半ばから後半のものである。だんじりの成立は、上野天神祭は400年の伝統があるが、実は江戸時代初期は、練り物という鬼行列が中心だった。だんじりが成立してくるのは、江戸時代半ばから後半にかけてである。幕も当然その時代のもので、少なくとも約200年は経っているので、貴重なものが多い。どんどん更新をしないと弱ってくるので、復元新調を行っている。本家の京都祇園祭では、驚いたことに、平山郁夫のシルクロードの絵を町の人が斬新で良いと思ったから掛けているところがある。それは、当初、祇園祭の幕が、外国の絨毯を掛けてカッコいいと思ったのときと同じで、それは正常発達であり、良いことだと思っている。だから、どこかで凍結させなくて良いと思う。そういう意味では、幕の活用も色々な保存の仕方、色々な活用の仕方があると考えられる。

(重藤委員) 中村委員は、幕は新調すればよいと仰ったが、やはり古いものは残していく方が良いと思う。見たい人は、やはり昔から使われている素晴らしいものを見たいと思うのだろう。福田委員の意見にあった、保存しながら見られるような場所が良いと思う。広いスペースは取れないので、月単位でどこかの町の幕が見られるようにして、その情報がSNSに上がり、だんじりの歴史も一緒に見られることを発信できれば、来訪の動機付けにつながると思う。

(福田副委員長) 現在やっている幕の写真撮影は、とても難しい。なぜなら、幕は蔵の中に平らな状態で入っている、出そうとすると、だんじりを外に出さなければいけない。そうすると何十人も的人员が欲しい。一番出しやすいのは、だんじり会館にだんじりが展示されている間である。蔵にだんじりが入っていないので、その時に蔵に置いてある幕を出して見せてもらっているが、もう少し工夫が必要だと思う。

中村委員の町の幕でもう一つ気に入っている点は、前幕の裏側は黄色のペイズリー柄で、非常にモダンであること。展示方法を工夫することで、普段は見られない幕の裏側が見られるような展示ができれば良いと、常々思っている。

(小林委員長) 江戸時代から伝わっている歴史的にも価値のあるものをしっかり保存していくこと。また、祭りは生きているものなので、京都祇園祭の話もあったが、

その時々祭りを担っている祭り町の人たちがどんどん自分たちが格好いいと思うものを取り入れて進化してきたというのも、祭りの本来のあり方なので、それを、どこかの時点で凍結させたり、これ以上進化させないというのも違うということ。祭りに対するモチベーションを維持させるという観点では、むしろ進化している方が正常だと思うので、その辺をどうやって両立させていくかは重要なことだと思う。そういう意味では、引退した幕や歴史的に重要なものは、きちんと保全保存していけるような仕掛け、仕組みが必要だということを感じた。

テーマ4 施設の運営（維持管理）/地理的な視点からあるべき姿

（小林委員長） 次に施設の運営、立地の問題も含めて検討していく。何を変えていき、何を守るべきかという論点は、今出てきた意見と類似するものである。さらには、施設の収益性はどのように考えるのか。或いは周辺環境の変化や将来を見据える中で、だんじり会館と、地域と、市外の来訪者の双方にとって良い機能は何かを考えていきたい。意見整理の欄の共通認識の枠が空欄になっているので、まだ皆さんから意見が集約できていない、一致点が無いかと思うので、意見を伺いたい。

（山口委員） とても難しい課題だと思う。今までの議論の中でも出ている、やはり地域を伝えていく、だんじりを直す場所が無いのであればだんじりのドックや、お囃子の練習場所にするのが利に叶っている。施設もだんじりが展示できるようになっているので、いかに皆さんが行きたいと思い、またそれが必要な場所になるように意味を持たせられるように、現状から何を変え、何を守るべきか。それを目的に考えていけば、色々なアイデアが出てくると思う。

幕の話も、そんな古いものが実際に祭りで外に出て、それらをだんじりで曳いているのは凄いことだと思う。普段はレプリカがあるけれど、年に1回の祭りで本物が見られるとなれば、行ってみようと思う人もいるので、そこをうまく誘導していけば良い。

基本的にはやはり、だんじりを改修する場所があると良いと思う。収益性の面で難しいのだろうけれど、何か策があるのではないかと思う。

（小林委員長） だんじりの修理ドックのような場所が必要という意見である。

（菊野委員） 現在、観光売店として機能がある場所は、ひょっとすると空き家になる可能性がある。そこをどうやって活用していくか。理想としては収益が上がる場所になって欲しい。

まちづくりや町中回遊の観点では、この会館へ来た人に町の魅力を伝えるような機能を持たせた方が良い。或いは、各町のだんじりというものがどんなものかを紹介し、その町はどのようなまちか、どこにあるか、町の周辺や天神宮を中心にどんな町だったのかが分かるようにするのも良いと思う。恐らく、観光客はそ

んなことは全く知らないだろうし、知らないから伊賀鉄道の線路から南側へ行かずに帰ってしまう。現在はそれぞれの町を紹介する施設が無い。各町の成り立ちや各町の個性を訴えかけえるような場所があると良い。現在、町のだんじり蔵の前に、蔵に収納されている各町のだんじりの紹介文が書かれているので、そこまで誘導する手段になれば良いと思う。

(小林委員長) どうしても線路で観光客の動線が切れてしまう。線路の南側が本来の祭り町なのに、人はそちらへ向かって行かない所が課題だという意見である。

(中村委員) だんじり会館は入館者数が少ない。行列ができていると思えば、忍者衣装の着替えの行列だった。入館料を払ってだんじり会館を見る人は、もう殆どいないのではないか。

今年の祭り以降、私が認識している範囲で話すと、例えば、中学・高校の放送部や新聞部、大学の研究会が東海地方から来訪されていた。ほかにも、京都、犬山から視察に来てくれた。私に対応もした。

秋以降、京都から祇園祭で白楽天山という山を持っている町の人 10 人くらいが来て、もちろん入場料は払って入館してもらっているが、彼らの視察目的はだんじり会館の出展物の見学に来たのではなく、お囃子の練習を見たかった様子だった。白楽天山は長刀鉾という大きな山を引っ張るものが、以前は、お囃子は山や鉾の上に乗って演奏をしていたのではなく、鉦、太鼓、笛が付いて歩いて一緒に行列をしていたようである。現在は白楽天山のお囃子は途絶えてしまっているので、京都の人は、上野天神祭や滋賀県の大津祭が京都祇園祭の流れを汲んでいることを聞いて、来訪したようであった。

福井からは、12 月頃に 20 人規模で来られる予定。目的は、上野天神祭の開催日を 10 月の第 3 金土日にするようになった経緯や、変更した後の状況を考察することという話で、そのついでに少しだんじり会館を見学したいという内容だった。そういう意味では、皆さんは価値観や期待を持って来てくれていると思う。しかし残念なことは、継続的な会館の収益や入場者の増加につながらないことである。

(小林委員長) だんじり会館に偶然訪れた福井や京都の人にとっても、会館で上野天神祭の歴史やまちの成り立ちが学べると良いわけである。町の成り立ちや町にとっての祭りの位置づけが、今の施設ではあまり見えづらい、良く伝わりにくいという現在のあり方は見直した方が良いという意見で、菊野委員の意見とも重なる意見だと思う。

(山口委員) 自分が他所の地域に旅行に行ったとき、どんな施設に行くかを考えたとき、やはり食は重要だと思う。例えば、だんじり会館の入場者だけが入れる食ブースがあり、そこで鬼などをモチーフにしたランチやスイーツが提供されるなど、会館に入場しなければ、そのスペースに入れない仕組みがあると良いと思う。

(小林委員長) 伊賀に来たら伊賀牛や色々な素材があるわけだから、それをだんじり会館に行けば特別メニューが食べられるというのも大事という意見である。

(福田副委員長) 事務局に宿題であるが、どの施設も恐らく悩みを持っていると思う。そういうことは調べているのか。

(事務局) 資料 4 は各施設のホームページ等から得た情報のみを掲載している。この後で協議していただくが、各施設に対してアンケートをするにあたり、どんな項目を調査すればよいかというご要望も聞かせていただきたい。

(福田副委員長) 市民も交えて議論をする中では、他所を参考にしようという意見も出てくる。例えば、収益面で課題のある施設など。その辺りをぜひ調べて活かしてもらいたい。

(小林委員長) 次の事項に関わることなので、そちらで協議をしたい。

テーマ 5 文化振興によるまちづくりの全体像

(小林委員長) 全体を通しての文化振興によるまちづくりはどうすればよいか。次世代の子どもたちの話、地理的な話であれば美術博物館構想とどのようにリンクしていくか。或いは、まちなかへの回遊性の観点で今の施設のあり方はどうなのかといった意見を伺いたい。美術博物館との関連はどうか。

(菊野委員) 行政からの情報が不足している。

(小林委員長) 現時点で美術博物館構想はどこまで話が進んでいるか、事務局から補足してもらいたい。

(事務局) 美術博物館構想は、実際に事務局を担っているのは美術博物館建設準備室という部署である。現状として、美術博物館の基本構想はすでに策定済みである。現在は、基本計画として展示内容などを含め、旧桃青中学校跡地を第一優先候補地として、計画を策定中である。

(小林委員長) 中身やコンテンツがどんなものを軸に検討されているか、そういう所はまだないのか。基本構想ではどうか。

(事務局) 美術博物館に関しても審議会を設置し、その委員会で検討を進めている状況である。

(福田副委員長) 自分自身は美術博物館の検討委員会委員も務めている。今の状態としては、だんじり会館は観光戦略課が中心になって考えており、美術博物館はそれとは関係なく、だんじり会館のすぐ近くにある旧桃青中学校で議論をしているということだが、全く別物で話が進んでいる。当然、別の施設なのでそれが基本であるが、今後、行政のあり方として双方を複合的に検討していく方が良いのかどうか。この委員会としてどう考えていくかにも絡んでくることである。

(菊野委員) できれば、美術博物館、図書館、芭蕉翁記念館について、今後の運営の仕方や方向づけも視野に入れながら、もう少し大きな視点でだんじり会館のあり方

を検討していくべきと考える。そういった情報や、市としての考え方がある程度示せるのであれば、お願いしたい。

(小林委員長) その辺りはお願いしたいところである。例えば、美術博物館ができるなら当然学芸員を置くはずなので、その学芸員にだんじりの展示品についてもしっかり説明していただき、だんじりと町の暮らしとのつながりも分かり易く説明をしてもらうとか、そういう期待はしたいところである。

或いは、有形文化財として歴史ある美術品としての幕、特に引退幕などは、もしかすると美術博物館で適切な空調管理の下で管理し、皆がそれを見に行けるようなかたちが望ましいかもしれない。その辺りをどのように有機的に連携するかは、ぜひ考えていく必要があると思う。

(2) 他自治体の山・鉾・屋台行事関連施設の事例検討

(小林委員長) 資料4で38自治体の事例が一覧になっているが、これを説明してもらうと時間が足りないので各自で確認していただくことにする。各施設に調査をするにあたって、実態としてどんな課題があるか、経費は黒字か赤字か、市からどれくらい補填しているか等が大事になってくると思う。他にどんな情報があれば良いか意見を伺いたい。

(菊野委員) これを全部調べるのは大変なので、いくつか絞って調査をした方が良いのではないか。

(福田副委員長) まずは文書による調査を実施していただくとして、次にヒアリングを行っていただく際、上野天神祭に似ている行事の施設をピックアップして調査をしてもらいたい。

(中村委員) 長浜、犬山はお願いしたい。

(小林委員長) 祇園祭の影響を強く受けているという意味では、大津祭が良いのでは。きっと似ている部分があるだろう。質問集を送付するアンケート調査は全件に対して実施してもらうとして、質問項目は福田委員と事務局で調整してから送ってもらいたい。

(事務局) 承知した。

(3) 今後のスケジュール

(小林委員長) 事務局から説明願いたい。

(事務局) 資料2 4頁に沿って説明。

(小林委員長) 質問は無いか。

(委員) 意見・質問無し。

(事務局) 後藤委員で紹介できなかった意見踏まえて、次回の資料をまとめていく。

以上